



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ **白駒妃登美**



名君知られざる優しさの秘密

上杉鷹山を支えた妻・幸姫

＊良縁の陰に隠された事実

「成せば成る 成さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の 成さぬなりけり」

あまりにも有名な言葉ですが、その出典をご存じですか？ 江戸中期の名君として知られる上杉鷹山の言葉と伝わっています。

日向（現在の宮崎県）高鍋藩主・秋月家の次男に生まれた鷹山は、出羽（現在の山形県）米沢藩の上杉家の養子となります。米沢藩主・上杉重定に男子がいなかったため、重定の正室が生んだ幸姫（ゆきひめ、よしひめ）と結婚することを前提に、この養子縁組が決まったのです。二万七千石という小藩の部屋住みの身が、一転、十五万石の大名家、それも室町幕府の重職を世襲してきた名門・上杉家を継ぐ立場となったのですから、まさに逆玉！

＊無類の優しさ

ところが、この結婚には、悲しい事実が隠されていました。実は鷹山は、幸姫との間に、夫婦としての関係を生涯持ちえなかったのです。幸姫には、脳障害と発育障害があったといわれていて、その心と体は十歳にも満たない幼女のような様子でした。

鷹山が幸姫の元を訪れると、彼女は喜び、人形遊びやおひな様の飾り付けを一緒にしようとしてくれます。すると鷹山は、彼女が満足するまで根気よく一緒に遊ぶのです。二人の結婚生活は、幸姫が三十歳で死去するまで、十余年に及びました。その間、鷹山は側室も置かず、妻を慈しみ続けました。後に鷹山は十歳年上で上杉家分家の姫であるお豊の方を側室に迎えますが、それは幸姫が亡くなったからのことです。

幸 姫 江戸中期の米沢藩8代藩主・上杉重定の娘。
(1753-1782) 上杉家の養子となった鷹山と結婚し、9代藩主の妻となる

【イメージイラスト】
アオジマイコ